

# Article 人工知能学会 30 周年記念式典 ならびに祝賀会開催報告

## Report about JSAI 30 Year Ceremony and Party

今井 倫太  
Michita Imai

慶應義塾大学理工学部  
Faculty of Science and Technology, Keio University.  
michita@keio.jp, <http://www.aillab.ics.keio.ac.jp>

**Keywords:** JSAI 30th anniversary.

2016 年 11 月 11 日、慶應義塾大学日吉キャンパス藤原洋記念ホールにて人工知能学会創設 30 周年記念式典が執り行われた。第三次人工知能ブーム最中に行われた式典であり、人工知能に直接携わっていないさまざまな業種の方達も参加する中で行われた。人工知能分野に対する世の中の注目の高さを改めて認識させられる式典であった。

式典に先立ちロゴとポスタのデザインを作成した(図 1)。ロゴは、ロボットデザイナーとしても著名な園山隆輔氏が、30 の文字をもとに作製した。ポスタは、本誌の表紙 (Vol. 30, Vol. 31, 2015 年 1 月号 ~ 2016 年 11 月号) を作製されている漫画家の石黒正数氏に依頼し、学会誌でもおなじみの蟻ロボットに登場いただいている。

記念式典は、午前の部・午後の部に



図 1 園山隆輔氏デザインの 30 周年ロゴと石黒正数氏デザインのポスタ

分かれて執り行われた。午前の部では、「人工知能と倫理—これからの世代が感じる人工知能の倫理感」ならびに「第 3 次 AI ブームを考える—学会に期待されること—」と題した 2 件のパネルセッションが催された。

「人工知能と倫理—これからの世代が感じる人工知能の倫理感」では、東京大学の松尾 豊氏の司会の元で佐藤太一さん(東京都市大学付属高等学校)、近藤那央さん(慶應義塾大学環境情報学部)、池澤あやかさん(タレント、エンジニア)、栗原 聡氏(電気通信大学)による議論が行われた(図 2)。若い世代が考える人工知能技術の現状や未来像について率直な意見交換がなされた。



図 2 パネルセッション「人工知能と倫理」左より松尾氏、佐藤さん、池澤さん、栗原氏、近藤さん

人工知能という広い概念のもとの議論であるので、若手パネリストが思い描く人工知能に当然ながら違いがあり、それを中心に最初の議論が進んだ。佐藤さんは人に見えない形の人工知能システムを想定しており、今のコンピュータネットワークの延長線上にある人工知能を考えている。池澤さんはドラえもんにも触れておられ、知能ロボットの観点から人工知能を捉えて

いる。人工知能によって人間の生活自体が知らないうちに変わっていく点や、悪用されると人に危険思想を埋め込んでしまう危険性について議論された。また、複数の人工知能研究所が設立されている点など国の人工知能政策に対する疑問についても若手の視点から述べられていた。

次に「第 3 次 AI ブームを考える—学会に期待されること—」と題して山田誠二氏(学会長)、浦本直彦氏(副会長)、野田五十樹氏(副会長)、小野田崇氏(理事)による現在の人工知能ブームを考える議論が行われた(図 3)。山田会長より人工知能研究の歴史やブームの変遷の話があり、学会としては現在の人工知能ブームに乗らない手はないと提言された。ただし、ブームへの乗り方が重要であるとの主張である。例えば、AI 研究開発の健全な発展を阻む世間一般からの誤解や過大評価を是正する必要があること、次の AI ブームを日本から起こすための斡旋をしていくことをあげられていた。野田副会長からは、深層学習で何が解けて何が解けないのか問題を提起していくことも

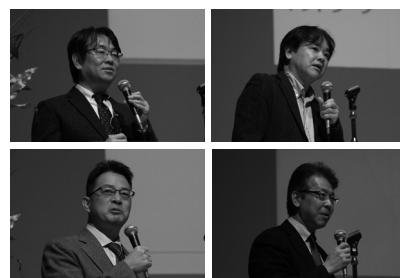


図 3 パネルセッション「第 3 次 AI ブームを考える」山田会長(左上)、浦本副会長(右上)、野田副会長(左下)、小野田理事(右下)

学会の役目として重要であると主張されており、健全な AI 研究開発に向けての一つの提案がなされた。

午後の部は山田会長の挨拶により会が始まった。学会設立数年後から続いていた会員数の減少が 2013 年より上昇に転じて過去最高の 4 339 名に達したとの報告があった。引き続き和歌山大学 瀧寛和学長より創設 30 周年のご祝辞をいただいた (図 4)。人工知能研究の冬の時代が再び来ないためにも学会として取るべき方向性を述べられた。

東京大学の中島秀之氏より「人工知能研究の歴史と未来：日本からの発信」と題した講演をしていただいた (図 4)。深層学習自体の方向性の研究よりも、深層学習を活用することで、今まで扱うことすらできなかった人工知能の課題にチャレンジできるチャンスが出てきていることをあげられている。特に、人工知能分野で昔より問題となっているトップダウン処理とボトムアップ処理の融合問題にチャレンジすべきであると主張されている。

引き続き「知能系学会サバイバル」と題したパネルが催された (図 5)。大森隆司氏 (認知科学学会会長)、萩原将文氏 (日本知能情報ファジィ学会会長)、



図 4 和歌山大学瀧学長のご祝辞 (左) 東京大学中島氏のご講演 (右)



図 5 パネル「知能系学会サバイバル」

藤田欣也氏 (ヒューマンインタフェース学会)、岩田和秀氏 (人工知能学会：長年事務局を務められた) がパネリストとして参加した。本学会の会員数回復に対して他学会は人工知能ブームの恩恵を受けていないことが主張された。特に、ファジィ学会を除く 3 学会では、今回の深層学習を始めとする人工知能ブームは異分野の潮流であると会員が受け止めている点が深く印象に残った。

次に三つの表彰式が行われた。1 点目の記念事業は「みんなで作る認知アーキテクチャ」ハッカソンである。参加 11 チームで争われたが、創設 30 周年記念最優秀賞は残念ながら該当者なしとなったが、奨励賞が「Accumulator モデルに基づく行動抑制型認知アーキテクチャ」大澤正彦 (慶應義塾大学)、島田大樹 (法政大学)、芦原佑太 (電気通信大学)、倉重宏樹 (電気通信大学) に贈られた。

2 点目は「人狼知能コンテスト」の表彰式である。人狼を行うことのできるエージェントを開発するコンテストであり、98 名が参加した。15 名が予選を通過し、次の 3 名に賞が贈られた。1 位：中田洋平氏 (一般参加者)、2 位：水越俊希氏 (芝浦工業大学)、3 位：柳町裕亮氏 (一般参加者)。

3 点目は 30 周年記念論文賞表彰である。本表彰は本学会創設 30 周年記念論文特集に投稿された論文から、完成度はもとより、新規性、有用性、発展性から、特に優秀な論文を選び、これを表彰するものである。また、これからの AI 研究の発展を担うのは若手研究者であることから、投稿は第 1 著者が 40 歳未満に限定した。全 32 件の投稿があり、11 件が採録となった。そして、この 11 件から、査読時の得点と査読結果を精査し、受賞候補を 6 件に絞り込み、この 6 本をさらに精査し、最終的に以下の最優秀論文賞 1 件、優秀論文賞 2

件を選出するに至った。

**最優秀論文：**「マルチモーダル情報に基づくグループ会話におけるコミュニケーション能力の推定」岡田将吾 (東京工業大学)、松儀良広 (東京工業大学)、中野有紀子 (成蹊大学)、林 佑樹 (大阪府立大学)、黄 宏軒 (立命館大学)、高瀬 裕 (成蹊大学)、新田 克己 (東京工業大学)

**優秀論文：**「文脈語間の対話関係を用いた単語の意味ベクトルの翻訳」石渡 祥之佑 (東京大学)、鍛冶伸裕 (ヤフー(株))、吉永直樹 (東京大学、NICT)、豊田正史 (東京大学)、喜連川 優 (NII, 東京大学)

**優秀論文：**「因子化漸近ベイズ推論による区分疎線形判別」藤巻遼平 (NEC)、山口勇太郎 (大阪大学)、江藤 力 (NEC)

式典終了後に慶應義塾大学協生館イベントホールにて記念式典祝賀会も催された。200 名弱の参加者、山田会長を始め、大須賀節雄元会長、田中英彦元会長、石塚 満元会長、山口高平元会長が出席されて盛大に執り行われた。

2016 年 11 月 24 日 受理

## —— 著者紹介 ——



今井 倫太 (正会員)

1992 年慶應義塾大学理工学部電気工学科卒業。1994 年同大学院計算機科学専攻修士課程修了。同年、NTT ヒューマンインタフェース研究所入社。1997 年 ATR 知能映像通信研究所へ出向。2002 年慶應義塾大学大学院理工学研究科後期博士課程修了。同年より、慶應義塾大学理工学部へ教員として着任。2009 ~ 10 年シカゴ大学客員研究員、博士 (工学)。現在、慶應義塾大学理工学部情報工学科教授および ATR 知能ロボティクス研究所客員研究員、本学会理事。